



今年も出張ふれあい教室が始まりました



休園中でも動物たちとのふれあいを通して命の大切さを学べるよう、市内の幼稚園、保育園、こども園の年長さんを対象とした「出張ふれあい教室」が、今年度も始まりました。モルモットの生態や性格についてのクイズに答えたり、キャベツを渡したり、優しいさわり方を学んだり、よく観察して絵を描いたり、さまざまな形の「ふれあい」を体験しています。さらに今年度は、ふれあいボランティアの皆さんによるモルモットを人に慣れさせるための取り組みにより、モルモットたちはより穏やかに出張ができるようになってきました。

動物たちとの優しいお付き合いが続けられるよう、今後も引き続き取り組んでいきます。

休園中の動物たちの様子や
最新の情報はコチラから▼

リニューアル工事のため、動物園は休園しています

ホームページ



Facebook



Instagram



YouTube



▲▼出張ふれあい教室の様子



とびだせ！市民レポーター！

市民文芸の選者ってどんな人？

今月の市民文芸は
本誌23ページに
掲載しています。
ぜひご覧ください。

「短歌」「俳句」「川柳」は、短詩形文学というジャンルの文学で、感情表現の1つとして愛好家が多くいます。今回は『広報こうふ』の市民文芸コーナーで選者を担当している3人の先生をご紹介します。これからチャレンジする皆さんに向けてアドバイスをいただきました。

◆31 音に思いを乗せて… 短歌：三枝 浩樹さん

中学3年生のときに父親の影響で短歌を始めた三枝さん、短歌歴は63年ほどになるそう。2018年には歌集『時禱集』で短歌界の最高賞である「短歌賞」を受賞。現在は全国の会員約300人の歌誌『沃野』の代表を務めています。



▲「うまい」「かっこいい」でなく、素直な思いを表現できているかが大切」と話す三枝さん

「短歌は不易流行が大事であると共に一期一会 心の日記。格好付けずに、日々の暮らしの中でふと思ったことに思いを巡らせ、楽しみながら作って欲しい」

◆日記のように… 俳句：井上 康明さん



▲「日常のさまざまな体験の1つ1つを大切にしたい」と話す井上さん

20代で俳句を始めた井上さんは、日本を代表する俳人、飯田龍太氏に師事。2013年1月に創刊された俳誌『郭公』の主宰を務めています。また、全国紙や地方紙に加え、多くの俳句大会の選者も務めており、毎月2万を超える俳句をみているそうです。

「日記のように、そのときの気持ちや感じたことを、季語に託して残せることが俳句の魅力。日々の暮らしの中の一場面を切り取り、気軽に楽しんでもらいたい。他人の作品を読むこと、自分で作ること、それぞれが大切。続けていけば必ず上達する」

◆新しさが大事… 川柳：深澤 弘さん



▲「川柳は季語を使わなくてよいので、初心者も取り組みやすいと思う」と話す深澤さん

知人に誘われ65歳から川柳を始めた深澤さんは、2014年に秋田県で開催された国民文化祭の川柳部門で山梨県人として初めて最高賞の特選を受賞。これまで、県川柳協会会長を務め県内唯一の吟社『甲斐野』の同人として選者を担当しています。

「作り方のコツは、五・七・五の定型を意識し、必ず指を折りながら作ること(中八や下六が時々あるがこれはよくない)。自分や社会、父母のことを詠むのが作りやすい。響きが悪くなるため『てにをは』を下五の締めに使わない」

市民レポーターブログも
ご覧ください▶

【市ホームページ】

市民レポーターブログ

検索



今月の担当レポーター 植松 裕二

短歌・俳句・川柳とそれぞれの魅力を改めて知ることができた貴重な取材でした。3人の先生に共通していたのは、いずれも日々の暮らしの中に作品のヒントが隠されていること。そして、作品は日記のようなものと話されていたことでした。日々の暮らしの中で起きたこと感じたことを17文字や31文字に凝縮してまとめてみると、新たな世界が開けてくるかもしれませんね！

